

る構造になっている。

著者の著作のひとつである『サンスクリット原典現代語訳 法華経』は今年、NHKの「100分de名著」で取り上げられた。本書の「はじめに」はその最終回の放送日に脱稿したことが記されているが、本書の読者として想定されているのはこれと同様に、一般の、これまで仏教に深く馴染んではこなかった人々だ。なかには「法華経」自体は読んだことのないという人も多いだろう。そうした読者が素朴に、ごく普通に抱くであろう疑問に対しても本書では丁寧に取り上げられている。

たとえば「第九章 授学無学人記品」の解説では、「授記されてからブツダになるまでに天文学的な時間を要する」（一七五頁）ことに関して述べられる。本文ではブツダが授ける授記の予言が果たされるとされる未来まで天文学的な時間を要することを、「あなたに一億円あげよう。ただし一万年後に」（一七五―一六頁）と言われるようなもので「何も嬉しくない」（二七六頁）と読者の気持ちを代弁する。そしてそれを、「授記という考えは小乗仏教において燃燈仏授記の物語として打ち出された」（同頁）ということから説明する。「釈尊が過去世において修行中に燃燈仏から、サハ―世界において天文学的な時間を経てシャーキヤムニという名前のブツタとなるであろうという予言」（同頁）を受けける逸話だ。『法華経』においては小乗仏教の出家者に対し、「相手の理解している言葉や概念を用いて、理解させる」（同頁）のだ。このように本書では読者に寄り添った表現から、ただ文面を読み進めるだけではない、一歩踏み込んで『法華経』を読み解くための工夫が随所に織

り込まれている。

とはいえ、本書は飽くまで「縮約版」であり、『法華経』のすべてを網羅したものではない。また、その要点を浮かび上がらせることに重点を置いたため、削り取られた部分も少なくない。そのために、この一冊で『法華経』のすべてを把握するわけにはいかないだろう。だが、その入門として、入口としての役割は十二分に果たしてくれる。また、『法華経』をよく知る読者にとっては、新たな見解、新たな疑問の足掛かりともなりうるだろう。

「おわりに」では、「100分de名著」放映時の朗読の素晴らしさについても触れられている。まずはテレビ、次に本書、そして『梵漢対照・現代語訳 法華経』、『サンスクリット原典現代語訳 法華経』と辿ることで、読者に対する『法華経』解釈のひとつの道しるべが見えてくるようだ。（赤羽優子）

金子昭『シュヴァイツァー——その著作活動の研究』（白馬社、二〇一八年一月）

原生林の医師、オルガン奏者、牧師——この異質な三者を十全に生きてはじめて三位一体となるシュヴァイツァーの生は、わたしたちの多くが幼い頃、子ども向けの伝記を通して、自らの将来を重ね合わせて夢想した経験をもつものである。だが、そこから先に進んで、シュヴァイツァーの哲学的・神学的著作を丹念に読み解き、その本質をとらえるのは至難の業である。

本書は、著者の前著『シュヴァイツァー——その倫理的・神秘主義の構造と展開』（一九九五年）に連なり、初期の文化哲学からかわらず的確に異質な文化を捉えるありようは、修道院の激務のなかで執筆に勤しむアウグスティヌスの姿とアマゾン奥地の写真家であるセバスチャン・サルガドの姿が二重写しになった生きざまのように評者には思われる。「わたしのうちに生きているのはもはやわたしではない。キリストが生きているのである」という使徒パウロの叫びに連なる神秘主義こそが倫理であり自覚であるというシュヴァイツァーの思想は、経験を通した矛盾・葛藤を経て、空無に至る。それは音楽の調和に連なる楽天主義を包み込むものであり、同時代の西洋人の東洋への眼差しとはまったく異質の、原生林で献身に勤しむシュヴァイツァーならではの「二重の異郷との出会い」のなかで生まれていることは特筆すべきであろう。（今村純子）

„Naturphilosophie und Naturwissenschaft: Tangente und Emergenz im interdisziplinären Spannungsfeld“, Ein Dialog von Herbert Pletschmann und Hashi Hisaki

ウィーン大学名誉教授で理論物理学者のH・ピッチャマン (Herbert Pletschmann) 氏の八十歳の誕生日を記念して、G・シユヴァルツ (Gerhard Schwarz) 編の Philosophysik: Festschrift für Herbert Pletschmann zum 80. が出版された。ピッチャマン氏の物理学者としての、哲学者としての、その学際領域の研究者としての、また、教師としての各側面、さらに、氏の研究業績について、それぞれ一章ずつが割り当てられている。ここで紹介するのは、ピッチャマン氏と、同大学哲学科の橋杵氏との対談で、哲学者と

中期の中国思想研究、壮年の宗教哲学、晩年の神学研究に至る、一九九五―二〇〇五年に刊行された哲学・神学関係遺稿集全八巻九冊を踏まえて、シュヴァイツァー全思想を詳らかにする、全八章、A五判で全四五〇頁に及ぶ大著である。

本書を貫く「生への畏敬」とは、次のようなものである。たとえば、「自分の嫌なことは他人にもするな」といったカント倫理学の基本を思い描くならば、他者がわたしたちの目の前に人間の姿をしてあらわれなくなつたとき、もしも「生への畏敬」がなければ、わたしたちは、何ら心の痛みを感じることなく、場合によっては「優しい善意の笑顔」をもつてして、他者を傷つけうる、さらには他者を殺害しうるということである。さらにはこの「生への畏敬」が力強く打ち出されるのは、「原生林を船が漕上する際に出会ったカバの群れ」のように人間以外の生きもの、さらには通常の意味では生あるものとはみなされない「雪の結晶」のもしも生への慈愛においてである。銘記すべきは、「生への畏敬」とは日々の自らの殺生の意識と表裏一体だということである。殺生によつて生かされているという意識がなければ、人は、集団のもしも「思考停止」のうちに容易に取り込まれ、子どもが壊れたおもちゃを捨てるように他者を扱いうる。それは、二度の大戦にみられる愛国主義から国家主義へ、国家主義から一足飛びのナチズムへの展開、さらには、冷戦における核兵器の威嚇的使用についても言えることである。

本書の白眉は、中盤の中国思想研究の考察であるが、アフリカの原生林で医師として激務のなか、翻訳書を通してであるにもか